



# TRC

## 2019 秋号

# ニュースレター 2019年10月

**(特活) NPO 研修・情報センター (Training & Resource Center)**

〒185-0012 東京都国分寺市南町 2-18-1 リビオ国分寺ステーションアベニュー1502

ticn@mui.biglobe.ne.jp <http://www2u.biglobe.ne.jp/~TRC/>

**特定非営利活動法人 NPO 研修・情報センター**  
**代表理事 世古 一穂**

韓国に行ってきました。9月30日と10月3日のソウルの大規模デモの背景はなか中わかりにくく複雑だ。反日と文在寅大統領退陣をかかげているが両者は矛盾しているのではないかと。反日は、文大統領の方針だ。日韓関係が極度に悪化している。両国関係はこれまでも何度か危機に直面し、その都度、話し合いで解決してきた。しかし、今度ばかりは難しい。関係改善の糸口は容易に見えてこないからだ。多くが文在寅政権の反日強硬姿勢に起因している。朴槿恵前政権時代の2015年に日韓外相会談が慰安婦問題の「最終的かつ不可逆的な解決」を確認したのを受け、日本政府が10億円を拠出した「和解・癒し財団」の解散を昨年11月、一方的に決定した。韓国大法院（最高裁）が昨年10月、日本企業に損害賠償を命じた元徴用工判決に関しても、日韓両国間の請求権問題を「完全かつ最終的に解決された」とした1965年の日韓請求権協定を基に日本政府が解決済みとしているのに対し、「1度の合意で過去の問題を終わらせることはできない」と協定無視とも言える姿勢を打ち出している。

保守と革新が激しい政権抗争を繰り返す韓国では、新政権が前政権の政策を全面否定するケースは珍しくない。しかし、国家間の確認や協定をいとも簡単に反故にしたのでは、国と国との話し合いや交渉は成り立たず、国際秩序も守れない。まして元徴用工問題は、文氏が大統領秘書室長を務めた盧武鉉政権が請求権協定で解決済みと解釈した経過もある。

日本政府が打ち出した輸出優遇国「Aグループ（ホワイト国）」からの韓国外しに対する文政権の反応も尋常ではない。優遇手続きを通常手続きに戻すだけで禁輸措置ではない。しかし、文大統領は「徴用工判決に対する報復だ」と激しく反発、「過去を反省もせず歴史を歪曲している」などと声高に日本を批判し、日米韓三国の安全保障の要である日韓軍事情報包括保護協定（GSOMIA）の破棄に踏み切った。日本に実体的影響はないようだが、中国、ロシア、北朝鮮を利する結果になり、アメリカ政府が不満と失望を表明する一方、トランプ大統領も8月にフランスで開催された先進7カ国（G7）首脳会議の席で「文在寅という人は信用できない」と述べたと伝えられている。また、今回の韓国の非難デモ・不買運動を見ると、一つの特徴が明瞭に現れている。非難デモでは、同じビラやプラカードを手にして叫んでいるし、不買運動では、同じビラが貼られ

ている。つまり、ある特定の主催者がそのビラやプラカードを製作して、参加者に配布しているということだ。「誰かが陰で扇動している」と読み取れる。現場にいて、いろんな人にきいてみてもなかなか真実はわからない。

複雑だ。

デモの呼びかけも組織的、構造はまだよくみえない

## 未来を拓く老年哲学～前号の続き

### 4 老成円熟ということ

豊富な経験に裏打ちされて、人格・知識・技能・教養などが十分に熟達していること。

▽「老成」は経験を十分に積んで物事にたけていること。「円熟」は人格や技量などが十分に発達していて、豊かな内容をもつこと。とあるが、老成円熟の境地に達している高齢者はどれだけいるのだろうか

老成円熟ということ

物の本には、豊富な経験に裏打ちされて、人格・知識・技能・教養などが十分に熟達していること。▽「老成」は経験を十分に積んで物事にたけていること。「円熟」は人格や技量などが十分に発達していて、豊かな内容をもつこと。とあるが、老成円熟の境地に達している高齢者はどれだけいるのだろうか？死に方の美学が、問われるが、死にたくても死ねない医療に恵まれた？今日、70歳以降をどう生きるかはなかなか難題だ。死に方の美学＝生き切る美学を、追求したいものだ。

命は守るものでなく、

命は使い切るものだ。

私が在宅医療の師と思う中野一志先生の言葉だが、老年哲学にとって、非常に深い示唆を含んでいる。

### 5 ジャイナ教

先人の美学を後世に

ジャイナ教、原始仏教と同時期にインドでできた宗教である。生き物を殺しては、いけないという厳格な戒律があり菜食主義です。面白いのは40台まではバリバリビジネス、多くはIT関係で、なんとインドのGNPの35パーセントを稼ぎだしているのです40台以降は修行の道に入り、裸体派の人は一物も持たずに修行、着衣派の人は2枚だけの、白い布だけを、持って修行。ジャイナ教を少しかじってみると、一物も持たず静かに亡くなっていくようです。物や家や環境は必要かもしれませんが、生まれた時のままで生を、使いきつて、さらりと亡くなる方々もこの地球上にはいらっしやることも事実です。老年哲学を考える時、北インドのジャイナ教から学ぶこともあるとかがえまます。多くの人は何が必要かを考えて生きていますので社会システムや行政の役割を考えるのでしよう。命を使い切る環境を整備することが、行政と政治家に課せられた使命だというのが現在の考

え方ですが、ジャイナ教の、人々のくらしをみると、それも案外つまらないことのようにこの頃思えるということである。決して行政や高齢者のための環境整備を否定しているわけではありませんが、物事をどこから考えるか、順序の問題だと思う。

## 6 がん哲学外来

がん哲学外来ときいて、何をイメージされるでしょうか？

「がん哲学外来」は2008年1月に順天堂大学医学部附属順天堂医院で開設されて以降活動の場を大学の、外に広げた「対話の場」である。提唱者で、担当医である樋野興雄医師の予想をはるかに超えたスピードで広がり、現在では全国80ヶ所で行われるほどになっている。外来という名前だが、料金は無料。30分から1時間ほど時間を、たっぷり取った個人面談を通して、がんに関わる様々な悩みを解消することを目的としている。悩みを解決するのではなく、解消するというのが「がん哲学外来」の特徴だ。悩むことは決して悪いことではない。がんを機会に、じっくり大いに悩み、考えることは人生を豊かにすることにもつながる。ただし悩みが治療を妨げているケースは問題だ。樋野医師は相談者ごとに、時間をとり、一緒になって「何が、治療を邪魔しているのか」を探っているのだという。その際には医師と患者という関係ではなく、対等の立場にたつこと、そしてその人の命のことだけでなく、家族や友人、この経験を通して知り合う他の人の命のことも一緒に考えて行くことを、ただモットーに、しているという。病理医で、臨床医ではない樋野医師は処方箋はださないが「言葉の処方箋」を持ち帰ってもらおうと奮闘しているのだ。老年世代の未来を拓くヒントがあるように

## 7 哲学不在の教育

「人生とは何か」「死とは何か」「人間とは何か」といったことを考えさせる教育が日本では欠けている。とくに老年哲学を考えるにあたって個人の信条や宗教などに抵触するという遠慮もあって、死の質を巡る議論を、避けているきらいがある。健康な時はそれでもかまわないが、たとえば、がんと診断されると、これまでの価値観では捉えられない現実にはうろたえてしまうのだ、死について考える習慣は必要なのだ。

死について真正面から考え始めることで、もっと別の視点、価値観があると気づきを得ることができる死生観を考えるためには社会的地位や名誉とは無関係に、ただここに生きていることの価値を見出す作業が必要だ。

次号に続く